『コリドン』から『ソドムとゴモラ』へ
――親近それとも対立？

吉川一義

『コリドン』と『ソドムとゴモラ』は、男性同性愛を語るのがタブーであった時代に激しい議論を巻きおこした。『コリドン』を禁書とすべきかを検討したパリ大司教区監視委員会は、1927年に教皇庁の異端糾弾機関「検邪聖省」に送った報告書で「実際ジッドとプルーストは文学における同性愛の二使徒である」と断言している[1]。私が本日この二作品を比較検討してみようと考えたのは、同じ性的傾向を持つふたりの作家が、同じ時期に、同じ主題を採りあげていることに起因する明らかな親近性にもかかわらず、この二作品の関係が、直接的なものであれ間接的なものであれ、これまでジッド研究においてもプルースト研究においてもほとんど等閑視されているからである[2]。

1921年に出版された『ソドムとゴモラ 一』は、シャルリュス男爵とチョッキの仕立屋ジュピアンの出会いとその交接を主人公が盗み聞くという場面で幕を開ける。この導入部のあと、『失われた時を求めて』のこの部分では、男色家たちが少年期にどのように自分の本当の嗜好を自覚するのかにはじまり、「自分の神をも否認せざるをえない」「母なき息子」「友情なき友」（Ⅲ, 16-17；⑧50[3]）として生きてゆかざるをえない社会的状況に至るまでの、同性愛者が置かれた状況のさまざまな諸相が総合的に考察されている。「ソクラテスふうの四つの対話」から成るジッド

---

[1] Jean-Baptiste Amadieu, « “Corydon” de Gide devant les tribunaux catholiques », *Bulletin de la Société de l’Histoire du Protestantisme français*, 2012, HAL, p. 21.

[2] 例外は、*Les* Corydon *d’André Gide*, présentés par Alain Goulet, avec le texte original du *C.R.D.N.* de 1911, chapitre consacré à « Du côté de chez Proust », p. 178-188.

の物語では、同性愛者の医者コリドン（名前はウェルギリウスの牧人にちなむ）が、少年愛を正常で自然な本能だと正当化する。この物語は1911年と1920年に匿名で印刷されたが、ジッドが自分の署名でこれを公刊するのはようやく1924年のことである。

この二作品は、べつべつに構想され推敲され、長期にわたる熟成の成果であるにもかかわらず、多くの共通点を有する。ふたりの作家による男性同性愛の記述は、十九紀末から二十世紀初頭にかけてソドミーが有罪とされ、裁判沙汰となった社会的背景を反映している[4]。この種の性愛は、古代ギリシャ以来いつの世にも存在したし、とりわけ宮廷や上流階級ではさしたる咎めも受けずに広まっていた。ところがヨーロッパの十九世紀末には、ソドミー（男性同性愛）が新たにスキャンダルとなった。ジッドとプルーストが無関心でいられなかったスキャンダルにかぎっても、男性同性愛そのものが1886年から非合法とされたイギリスでは、オスカー・ワイルドが1895年に逮捕され、二年間の獄中生活のあと、パリで客死した。1871年に制定された刑法第175条によってソドミーが二年の懲役となりうるドイツの社会で、もっとも世間を騒がせたのはオイレンブルク事件である。皇帝ヴィルヘルム二世が皇太子時代から恋人にしていた外交官フィリップ・ツー・オイレンブルクの名を冠したこの事件は、皇帝のフランス贔屓の政策を嫌ったジャーナリストのマクシミリアン・ハルデンが、宮廷に蔓延する女性的側近を糾弾し、とくにオイレンブルクとベルリン軍司令官モルトケ将軍を「ソドミット」として告発したことで事件化した。1907年から1908年にかけて三次にわたり名誉毀損をめぐる裁判が開かれたが、偽証罪で1908年五月に逮捕されたオイレンブルクは、自分の潔白を証明することができなかった[5]。

このふたつの裁判は、『コリドン』と『ソドムとゴモラ』の両方で想起される。

---

[3] 『失われた時を求めて』からの引用は、*À la recherche du temps perdu*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1987-1989, 4 vols に拠り巻数と頁数を記し、訳文は岩波文庫の拙訳に拠って巻数と頁数を示す。

[4] 以下の考察は、しばしば拙訳『失われた時を求めて』の第８巻『ソドムとゴモラⅠ』巻末の「訳者あとがき（八）」（2015, p. 576-605）と、そのフランス語版（K.Yoshikawa, « L'homosexualité et la judéité chez Proust, d'après les premières scènes de *Sodome et Gomorrhe* », *Littera*, Société japonaise de langue et littérature françaises, n° 1, 2016, p. 39-51）に依拠する。

コリドンは「われわれはワイルドや〔…〕オイレンブルクを知った」（*Cor.*, 66[6]）と有名な事件を列挙する。プルーストはその本の冒頭でイギリス詩人の投獄に言及している。「前日まではロンドンのありとあらゆるサロンで歓待され、あらゆる劇場で喝采されていた詩人が、翌日にはあらゆる家具付きの貸間から締め出され、頭を休める枕さえ見出せず、サムソンのように石臼をまわす」（Ⅲ, 17;⑧51-52）。『ソドムとゴモラ 二』では、シャルリュスがオイレンブルク事件の「もっとも高い地位にある被疑者のひとり」を想いうかべる（Ⅲ, 338；⑨225）。フランスの法律では同性愛自体はもはや犯罪ではなくなっていたが、しばしば公然猥褻罪によって弾圧された。コリドンの対話の相手が「ハルデンのような手合いに糾弾されて裁判沙汰になったら、どんな態度をとらざるをえないかわかっているはずだ」（*Cor.*, 66）と心配するのは、このような裁判という歴史的背景が存在したからにほかならない。『ソドムとゴモラ 一』の語り手が、同性愛者が「被告として出廷する」ときの「法廷の証言台」（Ⅲ, 16；⑧50）を引き合いに出すのも、同様の事情ゆえである。

十九世紀末には、刑法第175条の撤廃を求めたドイツの医師たちが、同性愛を病理的な正常な状態として捉えるべきだと主張した。カール＝ハインリヒ・ウルリヒス（1825-95）は、同性愛者を男性の身体に女性の心が宿った存在と考えた[7]。コリドンの「自然に反するとか、肉体に反するとかの語は、二十年と経たずしてまじめに受けとる人はいなくなるだろう」（*Cor.*, 74）という発言には、当時の医学界のこのような議論が反映さている。それと同様『ソドムとゴモラ 一』の語り手も、同性愛を「自然が無意識のうちにおこなう感嘆すべき努力のあらわれ」であり、「社会の当初の誤謬のせいで遠くに追いやられていたものへと忍び寄ろうとする秘かな企て」であると考える（Ⅲ, 23；⑧66）。

現在、もっとも普及している「同性愛」なる用語は、ベルリン在住のハンガリー

---

[5] 本事件に関しては以下の文献を参照。Maurice Baumont, *L'affaire Eulenburg et les origines de la Guerre mondiale*, Payot, 1933 ; Robert Beachy, *Gay Berlin*, Vintage Books, New York, 2015, p. 120-139.

[6] 『コリドン』（*Cor.*と省略）からの引用はつぎのアラン・グーレ編纂の刊本に拠り頁数を示す。André Gide, *Romans et récits II*, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 2009.

[7] J. E. Rivers, *Proust and the Art of Love*, Columbia University Press, 1980, p. 184 ; Robert Beachy, *op. cit.*, p. 18.

人文筆家カール＝マリア・ケルトベニー（1824-82）が1869年に編みだしたもので、それが世紀の変わり目にフランス語に導入された[8]。ジッドもプルーストもこの用語を用いてはいるが、それでも両者ともこの新語を嫌っていた。ジッドがそれよりも好んだのは「ペデラスティ」なる概念で、ギリシャ語のパイデラスティアに由来するこの概念は、フランスでは十六世紀から少年愛を指すのに使われていた。その派生語である「ペデラスト」はその実践者を指した。ジッドとプルーストがともに援用したプラトンの『饗宴』では、パウサニアスがこう主張する。愛の女神エロス［ウェヌス］には二種類あり、「万人向きのエロス［ウェヌス］」に鼓舞された男の愛は「男よりも女へ、精神よりも肉体へ」向かい、「天の神ウラノスの娘」、つまり「エロス［ウェヌス］ウラニア」はむしろ「みずからを律することのできる者たち[9]」、つまり「少年たち[10]」に愛着をいだく。このプラトンの理論にヒントを得たウルヒリスは、男性同性愛を擁護するため、1864年に「ウーニング」なる概念を導入し[11]、そこからフランスでは「ユラニスム」なる新語が生まれた[12]。ジッドはこの語も好み、コリドンは「自分の本が扱うのは健全なユラニスム、つまり〔…〕正常なペデラスティだ」（*Cor.*, 74）と主張する。

プルーストはジッドとは異なり、聖書の呪われた二都市に由来し起源は中世にまでさかのぼるソドムとゴモラをはじめ、その派生語である「ソドミー」やその実践者「ソドミット」（ないし「ソドミスト」）なる用語を用いた。また「きわめて不適切に同性愛と呼ばれるもの」（Ⅲ, 9;⑧33）よりも、ずっと実態に近いと判断して「倒錯者」（Ⅲ, 17；⑧50）なる語のほうを好んだ。「同性愛者」という語は「あまりにもゲルマン的かつ衒学的[13]」で、男に惹かれる要因となる倒錯者のうちに潜む女性

---

[8] おそらく十九世紀末。ただしラルース系の辞書に記載されるのは1907年。

[9] *Le Banquet de Platon*, traduit du grec par J. Racine, Mme de Rochechouart et Victor Cousin, Plon, 1868, p. 19-21.

[10] Platon, *Le Banquet*, présentation et traduction par Luc Brisson, « GF-Flammarion », 5e édition, 2007, p. 102.

[11] Robert Beachy, *op. cit.*, p. 17-18.

[12] 『グラン・ラルース仏語辞典』（t. 7, 1978, p. 6343.）に拠ると、ラルース系仏語辞典への初出を1904年とする。

[13] Marcel Proust, Cahier 49（n. a. f. 16689）, f° 60 v°.

の心という存在をないがしろにしていると思われたからである。この「倒錯者」という概念は、「シャルコ［1825-93］とマニャン［1835-1916］が性本能の倒錯」と要約した、ベルリンの神経科医カール・ヴェストファル（1833-90）の理論に由来する[14]。『グラン・ラルース仏語辞典』は、フランス語での「倒錯者」と「倒錯」の初出を1907年とする。

『コリドン』と『ソドムとゴモラ 一』は、同性愛が自然な行為であることを主張するために、当時の自然科学の成果、とりわけダーウィンの進化論を援用している点も共通する。「ダーウィンの業績」と進化論に通じていたプルーストは（Ⅱ, 651；⑦42）、「倒錯者」との類似を示すためにダーウィンの『同種植物における花の多様な形態について』（1878仏訳）を、とくにそれに付されたクータンス教授の「序文」を援用している（Ⅲ, 4-5, 30, 31；⑧25、79-80）。ジッドのほうも「ラン科の植物の不確実な受胎」（*Cor.*, 96）に言及するのみならず、「蔓脚類に関する研究を扱ったダーウィンの二著作」（*Cor.*, 87）を援用している。

ふたりの作家の緊密な交流は1912年12月、プルーストが自作第一巻のタイプ原稿をN.R.F.出版の創設者のひとりジッドに送ったときに始まる。よく知られているようにジッドは、その原稿を拒絶したあと、出版された『スワン家のほうへ』を読んで、遅ればせながら1914年１月、プルーストに「この本の出版を拒んだのはヌーヴェル・ルヴュ・フランセーズのもっとも重大な過ちになるでしょう、そのうえ私の生涯でもっとも心さいなまれる後悔の種になるでしょう[15]」という有名な詫び状を送った。しかしふたりの作家は、同じく1908-1909頃、べつべつに男性同性愛をめぐる考察の執筆を始めていた。ジッドは『コリドン』の第一稿（第一と第二の対話の主要部分）を1908年ごろに執筆し、1909年夏にはそれを親しい友人たちに読み

---

[14] Albert Moll, *Les Perversions de l'instinct génital. Étude sur l'inversion sexuelle*, traduit de l'allemand par Pactet et Romme, Georges Carré, 1893, p. 54. Voir aussi Chevalier, *Une maladie de la personnalité. L'inversion sexuelle*, 1893, ouvrage cité par Nathalie Mauriac-Dyer dans son article « À propos du "gigantesque entonnoir" : le discours médico-légal dans *À la recherche du temps perdu* », *Lectures de* Sodome et Gomorrhe, Cahiers Textuel, n° 23, Université Paris 7, 2001, p. 98.

[15] *Correspondance de Marcel Proust*, texte établi, présenté et annoté par Philip Kolb, Plon, t. XIII, 1985, p. 50

聞かせ、1911年５月には第三の対話の途中までの初版を匿名で少部数、12部または22部印刷させた[16]。プルーストも1908年５月、「ペデラスティに関する評論」の構想を友人ルイ・ダルビュフェラに打ち明け[17]、1909年ごろには「タントの種族[18]」というタイトルで同性愛者たちをめぐる最初の断章を執筆していた。

ジッドの『コリドン』執筆は第一次世界大戦で中断したが、1917年12月に再開。1918年６月８日付の日記には「ここ数日『コリドン』を完成すべく奮闘[19]」との記述がある。1920年３月には『コリドン』第二版が、やはり匿名で21部印刷された。ジッドはこのきわめて理論的な物語と並行して、同年５月、それと対をなす自伝篇『一粒の麦死なずば』を印刷させた。そのジッドはすでに1920年１月、親しいイギリス人女性ドロシー・ビュッシーにこう打ち明けていた。「私のほうは非売となる二冊の本を内密に印刷させます。どちらもあなたを仰天させるような本ではないと思いますが、そのうちの一冊は私を監獄にぶちこみかねない性格のものです[20]。」ジッドはこの二著を大胆すぎると判断して公刊する勇気が出ず、きわめて親しい友人にのみ回覧させたのである。

ところがジッドを『コリドン』公刊に踏み切らせる出版状況があらわれた。その新刊のひとつは、当時の反ユダヤ主義と反ゲルマン感情からフランスでは紹介が遅れていたフロイトの著作の最初の仏訳である。これを読んで感激したジッドは、1921年４月26日、これまたドロシー・ビュッシーにこう書いている。「フロイトの『精神分析の起源と発展』に関する連載第三回を（「ジュネーヴ誌」で）読み終えたところです。〔…〕早くもフロイトに『コリドン』のドイツ語訳の序文を書いてもらえないかと夢見ています。もしかするとフランス語版よりもそちらを先に出すことができるかもしれません[21]。」フロイトの論考はもちろん直接同性愛を扱ったもの

---

[16] Alain Goulet, « Notice » sur *Corydon*, in André Gide, *Romans et récits II*, éd. cit., p. 1169-1170 ; *Les* Corydon *d'André Gide*, éd. cit., p. 23.

[17] *Correspondance de Marcel Proust*., éd. cit., t. VIII, 1981, p. 113.

[18] Cahier 6 (n. a. f. 16646), f° 37 r°.

[19] André Gide, *Journal*, édition établie, présentée et annotée par Éric Marty, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, t. I, 1996, p. 1069.

[20] *Correspondance André Gide Dorothy Bussy I*, *Cahiers André Gide 9*, Gallimard, 1979, p. 168.

[21] *Ibid*., p. 252-253.

ではなかったが、ジッドはこのオーストリアの精神分析家なら『コリドン』を熱心に支持してくれるのではないかと期待したのだろう。同じ観点からわれわれの注意を惹くのはジッドが、この直後、フィリプ・コルブの書簡日付推定によると「1921年５月13日（金）の朝」、プルーストに「『ジュネーヴ誌』に出たフロイトの驚くべき論文」を読むように勧め、まだ読んでいなければ貸すと書き送っていることである[22]。ただ残念ながらプルーストがその後フロイトの論文を読んだという証拠は残っていない。

私は、ジッドがこの時期プルーストにフロイトの論文を読めと勧めたのは、単なる偶然ではないという確信をえた。実際、ジッドがフロイトをはじめて読んで感激した数日後の５月２日には、プルーストの『ソドムとゴモラ 一』が出版された。そしてジッドがプルーストの自宅を訪ね、ふたりが腹蔵なく同性愛談義をくり広げたのは５月13日の夜、ほかでもない、ジッドがプルーストにフロイトの論文を貸すと書きおくった日の夜である。この会談を記録したジッドの『日記』の有名な一節をふり返っておこう。「プルーストは自分のユラニスムを否定したり隠したりするどころか、それを表に出した。いや、それを鼻にかけていた、と言いたいほどだ。女は精神的にしか愛したことはなく、セックスは男としかしたことはないという[23]。」この証言は、プルーストの性癖を伝える貴重な資料として頻繁に引用される。しかしこの直接伝えられた告白に光が当たるあまり、ふたりの作家がこの時期に会ってそれぞれの「ユラニスム」を論じた動機のほうは闇に葬られてしまった。ジッドがプルーストに会いに行ったのは、『ソドムとゴモラ 一』を読んで、『コリドン』（いまだ公刊されていなかった1920年の第二版）をプルーストに読んでもらいたいと考えたからである。ジッドは同じ日の日記にこう書いている。「『コリドン』を持ってゆくと、プルーストはだれにも他言しないと約束してくれた。私の回想録〔『一粒の麦死なずば』〕のことをすこし話すと、プルーストは大声を出して「なにを語ってもいいが、けっして私とは言わないことですね」と断言した。そんなことを私はやりたくない。」

５月17日、プルーストの運転手はジッドの家に赴いて『コリドン』を返却した。

---

[22] *Correspondance de Marcel Proust*, éd. cit., t. XX, 1992, p. 262.

[23] André Gide, *Journal*, éd. cit., t. I, p. 1124.

これを読んだプルーストの感想は残されていないが、以下、『コリドン』の作者と『ソドムとゴモラ 一』の作者とのあいだに秘かに交わされた議論を再構成してみたい。先に引用したジッドの『日記』の一節には、プルーストのもうひとつの重要な発言が報告されている。「プルーストは私に、ボードレールはユラニストだった、『ボードレールがレスボスについて語るやりかた、いや、それについて語りたいという欲求を見るだけで、それは充分に確信できる』と語った」。この驚くべき断言を理解するには、プルーストが当時「ジッドの序文[24]」まで期待しながら準備していたボードレール論、つまり1921年6月1日付の雑誌 *N.R.F.*に「ボードレールについて」というタイトルで発表された論文を参照しなければならない。この論文のなかでプルーストは、ボードレールの詩篇「レスボス」の詩句、「レスボスの島は、地上すべての者のなかで俺を選んだ／その島の花咲く乙女たちの秘密を歌うために」を引用して、こう言い添えている。「私はソドムとゴモラとのこの『親密な関係』を自作の終わりのほうで（最近出版された『ソドムとゴモラ 一』ではない）、シャルル・モレルという粗野な男に委ねたが〔…〕、ボードレールはきわめて特権的なやりかたでこの関係にみずから自分自身を『当てはめた』ようである。ボードレールがなぜこの役割を選びとり、いかにこの役割を果たしたのか、それを知ることができればどんなに興味ぶかいことであろう。シャルル・モレルの場合には理解できることが『悪の華』の作者にあっては深い謎のままなのである[25]。」

ボードレールのこの詩句がなぜ「ソドムとゴモラとの『親密な関係』」を築くことになるのか？また、男色家シャルリュスから庇護され、メーヌヴィルの売春宿でゲルマント大公と「一夜をともにした」（Ⅲ, 464；⑨503）モレルが、なにゆえ、だれにもましてこの「親密な関係」を体現しているのか？ 「深い謎のまま」と形容すべきは、むしろこのプルーストの発言だと言いたくなる。この謎を解明する鍵は、私見によれば、ジッドの前では語られながらこの論文では隠されている「ボー

---

[24] プルーストは1921年4月19日または20日にガストン・ガリマールに宛てた手紙で「論文の四分の三」ができたこと、「ジッドの序文がもらえないのは大変残念だ」と書いていた（*Correspondance de Marcel Proust*, t. XX, p. 196）.

[25] Marcel Proust, *Contre Sainte-Beuve*, précédé de *Pastiches et mélanges* et suivi de *Essais et articles*, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1971, p. 633.

ドレールはユラニストだった」という仮説にある。もうひとつの重要な手がかりは、プルーストの小説の「終わりのほう」で明らかになるモレルのバイセクシャルの発見がもたらしてくれる。ジッドに告白をした1921年の時点でプルーストは、『囚われの女』の原稿でモレルをきわめて特殊なバイセクシャルの男として描いていた。レスビアンとして有名な女優レアがモレルに宛てた恋文で、モレルに「もっぱら『女性形』で語りかけ、『貴女(あなた)って下劣！ まったく！』『あたしのいとしい女(ひと)、あなたもやっぱりあの仲間なのね』言っていた」というのだ（Ⅲ, 720；⑪62）。ソドミットでありながらゴモラの女の愛人たるモレルは、まさしく「ソドムとゴモラとの『親密な関係』」を体現していることになり、われわれが「ユラニスト」たる詩人ボードレールに託されたレスボスの「秘密を歌う」べく「地上すべてのなかで選ばれた」役割を理解するのを助けてくれるのである。ジッドとのユラニスムをめぐる会談の直後に発表されたこのプルーストの一節は、自分の描くソドムの世界はコリドンの賞讃する少年愛という限られた展望をはるかに凌駕している、これを超えるものが果たして書けるのかというプルーストがジッドに投げかけた挑発として読むべきではなかろうか。

フロイトの文章とプルーストの『ソドムとゴモラ 一』、この二篇を読んだことがジッドを『コリドン』公刊に踏み切らせる契機になった。1922年になると、ジッドは８月13日付の日記に『コリドン』のための新たな「序」の草案をつくり、「十年が経ち、多くの事例や新たな根拠やさまざまな証言が、私の理論の正しいことを証明してくれた」と書いた[26]。そして興味ぶかいことに、「1922年11月」の日付のある、プルーストの死の前後に執筆された『コリドン』24年版の序文で[27]、ジッドは『ソドムとゴモラ』の著者への反論を注に記した。「いくつかの書物――とりわけプルーストの本――のおかげで一般の人は、知らないふりをしていたこと、まずは知らないほうがいいと考えていたことに、以前ほど怖気をふるわず、それを冷静に考察するようになった。〔…〕しかしこれらの本は、同時に世論を過たせることに大いに貢献したのではないかと、私は心配している。ドイツで戦争のかなり前にヒル

[26] André Gide, *Journal*, éd. cit., t. I, p. 1186.

[27] アラン・グーレに拠ると、この序文は「プルーストの死の直後」（プルーストの死は1922年11月18日）に執筆されたという（前掲書、180頁）。

シフェルト医師が提唱し、マルセル・プルーストが依拠しているとおぼしい男＝女の理論、つまり「ゼクスエレ・ツヴィッシェンシュトゥーフェン」（中間の性）は――間違いではないかもしれないが、同性愛のいくつかの症例、〔…〕倒錯や女性化やソドミーだけを説明し、議論しているにすぎない。」（*Cor.*, 60）。

性科学の先駆者とされるベルリンの医師マグヌス・ヒルシュフェルト（1868–1935）は、二十世紀初頭に同性愛を説明するために、たしかに「中間の性」ないし「第三の性」の理論を唱えた[28]。ただしすでに見たように、ジッドが主張するのとは違って、「男＝女の理論」は、ヒルシュフェルトが唱えたものではなく、ウルヒリスが提唱したものである。プルーストはたしかにこの男＝女の理論に依拠して、「女みたい」なシャルリュスを描いたが（Ⅲ, 16；⑧49）、シャルリュスはこの一節では「巨大なマルハナバチ」にたとえられ、むしろ男役を演じている。それにたいしてジュピアンは「マルハナバチにたいしてランの花がするような媚をふくんだポーズ」をとり（Ⅲ, 6；⑧28）、むしろ「雌」（Ⅲ, 8；⑧31）とみなされる。プルーストは、この「男＝女」説の矛盾には気がついていたようで、まるでジッドの反論に先回りするかのように、語り手にこれは「当時の私が想い描いていたがあとで修正される理論」（Ⅲ, 17；⑧51）だと断っている。実際プルーストは続篇で、すでに検討したモレルのようなバイセクシャルを何人も登場させることになる。

ジッドは序文に付した問題の注で、こう言い添えている。「この『第三の性』の理論は、『ギリシャ的性愛』と呼び慣わされているペデラスティをとうてい説明することはできないだろう」（*Cor.*, 60）。この主張は、コリドンの最終の願望、つまり「国家に大いに貢献するために」「ギリシャの風習に立ち返りたい」という願望と呼応する（*Cor.*, 140）。コリドンは「十三歳から二十二歳の少年にとって、愛してくれる男があらわれることほど望ましいことはない」と主張する（*Cor.*, 142）。要するにジッドは、おのが理想の愛はギリシャふう少年愛（ペデラスティ）にあり、プルーストには親しい「倒錯や女性化やソドミーの症例」とは異なると、コリドンに主張させているのだ。

ジッドは1921年12月、*N.R.F.*誌に発表された『ソドムとゴモラ 二』の抜粋を読んで「怒りがこみあげ」、『日記』にこう記した。「プルーストがなにを考えている

---

[28] Robert Beachy, *op.cit.*, p. 88.

か、どんな人間であるかを熟知している私としては、これは欺瞞、自己弁護欲、カムフラージュ以外のなにものでもないと考えざるをえない[29]。」ジッドの大専門家クロード・マルタンは、この怒りの動機をこう考えている。「明らかにプルーストは〔…〕倒錯を病気として描いた。倒錯の秘匿性がプルーストには追い求める快楽の決定的要因とさえ思われたのだ。プルーストが倒錯について語ったのは大した成果であるが、倒錯にかんする偏見を少なくするのにはほとんど貢献しなかった。ジッドのほうは敢然とその弁護に立ちあがらんとした〔…〕[30]。」また『コリドン』校訂版の編者アラン・グーレは、こんな結論を下している。「プルーストは同性愛をフィクションという迂回路を通じて描き、それに変装をまとわせるか〔…〕、ジッドからすると好意的ではない『嫌悪を催すような』光を当てるかした〔…〕。ジッドは『私』の名で発言することを重視し、同性愛をおのが本性と人生のまぎれもない事実として引き受けた[31]。」

たしかに『ソドムとゴモラ　一』には、一見、倒錯者やソドミットにたいする差別や揶揄とさえ受けとられかねない言辞、現代の読者の顰蹙を買いかねない言辞が含まれている。倒錯者は「たいてい見るに堪えない一種族に特有の肉体および精神の特徴を備えるにいたる」（Ⅲ, 18；⑧53）とか、「祖先が呪われた町から逃れるのを可能にした虚言」を遺伝として受け継いでいる（Ⅲ, 33；⑧86）とかの言辞である。同性愛者がしばしば他人の同性愛をあばくのに熱心で、「隠しおおせた者がいると好んでその仮面を剥ごう」とし（Ⅲ, 18；⑧53-54）、「おのが悪徳をまるで自分のものではないかのような口ぶりで面白おかしく語りあう」（Ⅲ, 19；⑧56）のと同じで、こうした言辞はプルーストが自分自身に同性愛の嫌疑がかからぬように仕向けた不誠実、陰険な策略なのだろうか。しかしこのような辛辣な攻撃をプルースト自身の見解だと考えるのは間違いであろう。おそらくプルーストは、差別的言辞を得々として弄する人たちによって広められた紋切型をまるで自分の言辞であるかのように装っているのだ。『ソドムとゴモラ　一』では同性愛者の置かれた状況は、い

---

[29] André Gide, *Journal*, éd. cit., t. I, p. 1143.

[30] Claude Martin, *Gide*, « Écrivains de toujours », nouvelle édition revue et corrigée, Seuil, 1995, p. 148-149.

[31] Alain Goulet, « Notice » de *Corydon*, éd. cit., p. 1174.

わゆる正常とされる世間の人たちのプリズムを通して描かれている。「世間が不適切にも悪徳と呼ぶもの」（Ⅲ, 19；⑧56）とか、「呪われた不幸にとり憑かれ、嘘をつき、偽りの誓いを立てて生きてゆかざるをえない種族」（Ⅲ, 16；⑧50、傍点はいずれも引用者）とか、言われていることに付された留保と様態がその証拠である。プルーストは、この外部の視点に立つことによって、自己の同類の偽善を余すことなく暴きだすことができたのである。

ジッドが『ソドムとゴモラ』を遠慮なく公然と批判したのにたいして、プルーストは『コリドン』についてなにも語らなかった。この未刊の書について他言しないと、ジッドに約束したことを守ったのである。とはいえわれわれは『囚われの女』のなかに、コリドンの語った恋愛礼讃にたいする、暗黙のうちの、だが明々白々たる批判を読みとることができる。プルーストの語り手は、古代において「青年を愛することは、こんにちなら（プラトンのさまざまな理論よりもソクラテスの冗談がその事情を明らかにしてくれるように）踊り子を囲っておき、やがて婚約するようなものであった」（Ⅲ, 710；⑪38）と主張する。このたとえが言わんとしているのは、古代ギリシャにおける青年愛は、聖人君子による若者の教育という機能を担っていて、若者が成人するとその役目を終えた、それゆえこれは「慣習的な同性愛」（同上）で、「当時の流儀に従っているにすぎない」（*Ibid.*, ⑪40）ことを示している。だからこそプラトンの『饗宴』を締めくくる対話でソクラテスは、プルーストに言わせると、若いアルキビアデスの恋心の告白を嘲笑したのだ。おまけにプルーストはきわめて重大な一文を書き添えている。「さまざまな障害にもかかわらず生き残った同性愛、恥ずかしくて人には言えず、世間から辱められた同性愛のみが、ただひとつ真正で、その人間の内なる洗練された精神的美点が呼応しうる唯一の同性愛である」（同上）。われわれがこの一文を『コリドン』への批判と考えるのは、この一節が1921年、プルーストがジッドの未発表の物語を読んだあとの加筆の一部だからである。この一節は、原稿帳に貼りつけた長い紙片（プルーストのいう「パプロル」）に記されたもので[32]、そこに有名な連続殺人鬼「ランドリュー（実際にこの男が何人もの女性を殺したと仮定して）」（Ⅲ, 710；⑪37）への言及があり、その世間を騒がせた裁判が始まったのが1921年11月だった。こうした状況を勘案すると、

[32] Marcel Proust, Cahier IX（n. a. f. 16716），f° 78 r°. 本論末尾のこの紙片の図版参照。

「慣習的な同性愛」と「恥ずかしくて人には言えず、世間から辱められた」「ただひとつ真正」な同性愛との峻別は、『コリドン』にたいする厳しい反論と考えられるのである。

以上のように、同様の性的嗜好から出発したふたりのN.R.F.の作家は、同様の社会的状況から、根本的に相異なる言説をひき出した。一方はおのが嗜好を一人称で語るとともに公然とペデラスティを礼讃し、もう一方は自分の性癖を隠しとおすとともにソドムの住民のむしろ否定的側面を強調した。このような対立をどう説明すべきだろう？ジッドのことだから、自分のペデラスティを率直に告白し、それを包み隠さず擁護したのは、おそらくプロテスタントの信仰に鼓舞された真摯さへの倫理感ゆえだろう。ジッドは1923年12月、『コリドン』の校正を終えたあと『日記』に「私は嘘が大嫌いだ、私のプロテスタントの信仰が緊急時に拠り所とするのはその点である」と記した[33]。ジッドが『一粒の麦もし死なずば』において波瀾万丈の青春期を語るのに一人称を選択したのもそれゆえであろう。これにたいしてプルーストは真摯といわれる告白にきわめて懐疑的である。というのもプルーストの見るところ、「嘘をつき、偽りの誓いを立てて生きてゆかざるをえない」のは「呪われた不幸にとり憑かれた種族」（Ⅲ, 16;⑧50）だけの宿命ではないからである。プルーストは、だれの人生においても「嘘とは、最も必要にして最もよく使われる自己保存の道具」（Ⅲ, 676；⑩381-382）であると考えていて、それゆえその小説には嘘をつく人物が溢れている。このような嘘の支配からプルーストは、「その人に軽蔑されるのが最も辛いのでわれわれがいちばんよく嘘をつく相手はわれわれ自身」だという究極の結論をひき出している（Ⅲ, 271；⑨69）。プルーストがジッドの意図に投げかけた警告（「なにを語ってもいいが、けっして「私」とは言わないこと」）は、自分の発言の責任をとらなくてすむという言い逃れではなく、いかなる一人称の告白も陥るほかない自己正当化という危険にたいする明晰な不信の表明なのである。

この対照的なふたつの態度は、どちらが正しいと言えるのだろう？　ジッド研究者がしばしばおのが好みの作家を擁護したのとは正反対に、最初のプルースト伝を準備していたレオン・ピエール＝カンは、1924年に『コリドン』は「偽善の書」だ

[33] André Gide, *Journal*, éd. cit., t. I, p. 1235.

と書いた[34]。私としては、ふたりの作家の見解はどちらもそれなりに正しい、ふたりともそれぞれの言い分がある、その相容れない相違は両者の個性の際立った違いに由来すると言いたい。後年ジッドは、やはり『コリドン』を「私にとっては私の著作のなかで最も重要なもの[35]」と書くし、「この本は〔…〕最も役立ちうる〔…〕、人類の進歩に最も役立つもの[36]」とみなす。『コンゴ紀行』(1927)や『ソ連から帰って』(1936)を書いたジッドは、なによりもそう呼ばれる以前のアンガージュマンの作家、サルトルの先駆者であり、『コリドン』も現代のLGBT運動の先駆と考えることもできる。これにたいしてプルーストは、非アンガージュマンの作家、「懐疑の時代」の作家である。いまや以前と比べてジッドがあまり読まれず、プルーストが流行っているのは、われわれが同類の真摯さや人類の進歩を信じることが困難な不幸な時代を生きているからかもしれない。

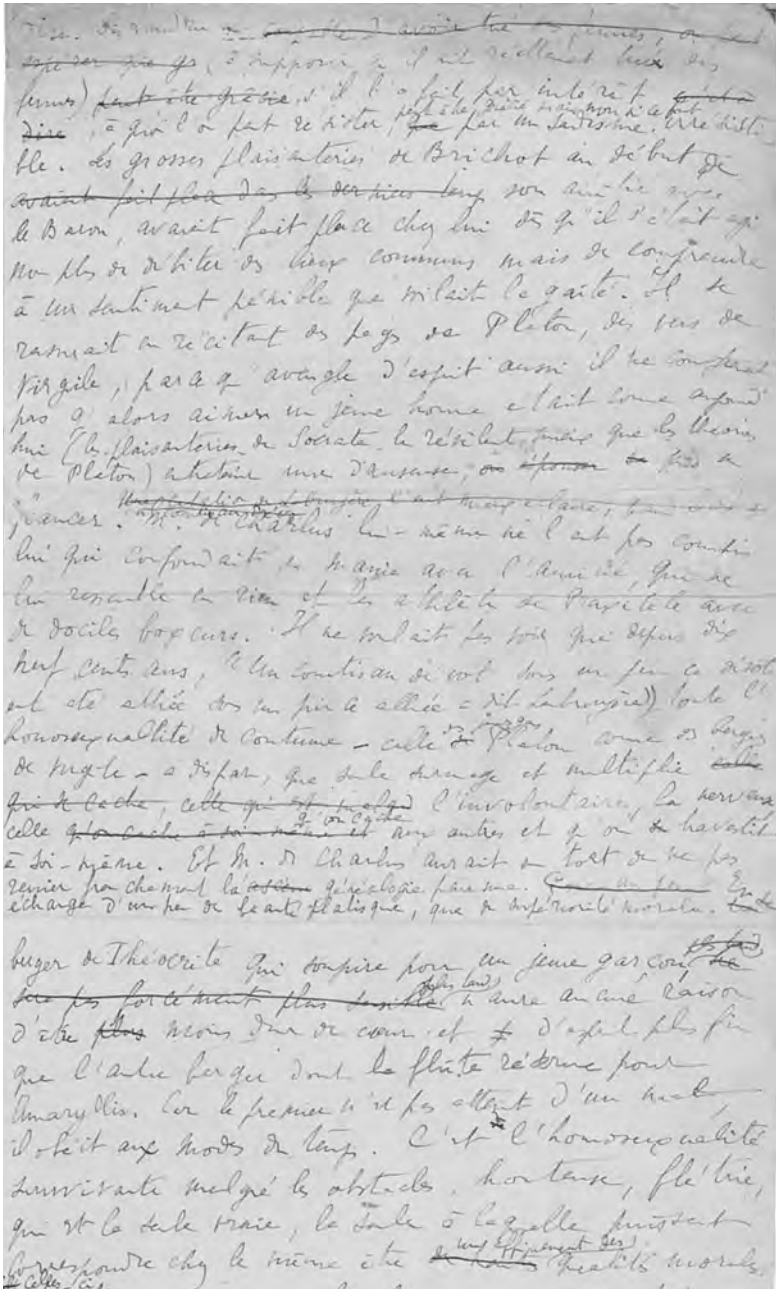
---

[34] Léon Pierre-Quint, « Sur *Corydon* », *Le Journal littéraire*, 12 juillet 1924, p. 12.

[35] André Gide, *Journal*, 19 octobre 1942, éd. cit., t. II, p. 842.

[36] *Ibid*., janvier 1946, p. 1017.

謝辞：本論のために貴重な図書を貸与くださった吉井亮雄、斉木眞一の両氏に篤くお礼もうしあげる。



Cahier IX（BnF, n. a. f. 16716），f° 78 r°，papier collé.